

B 1 幼児の思いやり行動の構造解析—年中児（4才—5才）

大妻女子大人間生活科学研 ○長山篤子

大妻女子大家政 平井信義 千羽喜代子

目的 我々は、これまで幼児の思いやりの精神構造とその発達過程を明らかにするために、3名の幼児をそれぞれ3年間計9年間自然観察法に基づき追跡的に観察し、その行動事例から大項目10と小項目50の行動項目を設定してきた。更にこの行動項目の妥当性を計るために5才児63名に対して50項目からなるインベントリーにより調査を実施した。その結果については、第43回家政学会において発表した。今回の研究の目的は、発達過程を明らかにし、行動項目の精選をするために4才児420名に対し同じ50項目からなるインベントリーにより調査を実施した。

方法 思いやり行動観察研究園11園の年中児（4才—5才）420名を対象に各々の園の担任保育者が観察者となり思いやり行動項目50からなるインベントリーにより思いやり行動を評定した。その結果を、年中児（4才—5才）の思いやりの構造を明らかにするために、因子分析を実施した。また行動項目を精選するために共通性の推定結果を用い行動項目の検討を行った。

結果 因子分析の結果以下のように6個の因子を抽出する事ができた。
①援助行動 ②自己主張 ③物や状況に対する共感 ④相手の気持ちを受入れ共有する行動 ⑤協力行動 ⑥創造・充実などの自己活動。 この結果は、昨年度実施した年長児（5才—6才）の構造と比較して、4個の因子の減少であった。年齢が高くなるほど思いやりの構造は複雑になると考えられる。また精選の過程で3つの項目について問題があり前年度の結果と合わせてこれらの項目を検討した。